

松山市文化財調査報告書19

高月山古墳群調査報告書

1988

松山市教育委員会

高月山古墳群

1988

松山市教育委員会

——序——

近年、著しく諸開発が進んで行く中で埋蔵文化財の発掘調査も激増しています。これらの状況下で昭和62年度では、縄文時代晚期農耕の大測遺跡、全国でもあまり例を見ない官衙遺構検出の来住廃寺跡調査、平形銅剣出土の祝谷六丁場遺跡などで大きく歴史的調査成果を得るなど、マスコミにも多く取りあげられ注目された所であります。

私共にとって埋蔵文化財がより身近に感じられるようになってきました。また、これら歴史的文化遺産は保護、顕彰して将来へ受け継ぎたいと思います。

今回ここに松山市勝岡町に所在する高月山古墳群を調査した調査成果を報告書刊行という形で発表する事になりました。末書に収録された資料が、市民各位の皆さんに、また広く歴史研究及び学術研究の分野にも役立つことを願うものであります。

本書を刊行するにあたりまして、関係者をはじめ、多くの方々のご理解とご協力いただいた事に厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和63年3月31日

松山市教育委員会

教育長 西原 多喜男

例　　言

1. 本書は、松山市勝岡に所在する高月山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和62年10月8日から11月11日まで松山市教育委員会が実施し、試掘調査及び発掘調査費用は鶴松下建設が負担した。
3. 整理作業及び報告書作成は、島瀬美穂、中野祥子、石丸直樹、河野史知、福田宏一、山之内志郎、丹下道一が行ない、宮崎泰好が総括した。
4. 写真撮影は、西尾幸則、宮崎が行った
5. 本書の編集は、西尾、宮崎が行ない、執筆は宮崎が行なった。

6. 調査組織

松山市教育委員会

教育長　　西原多喜男

参考事　　松原　重勝

次長　　井手　治己

文化教育課長　　伊賀　俊輔

　　"　課長補佐　大野　偉治

文化第2係長　　戸田　浩

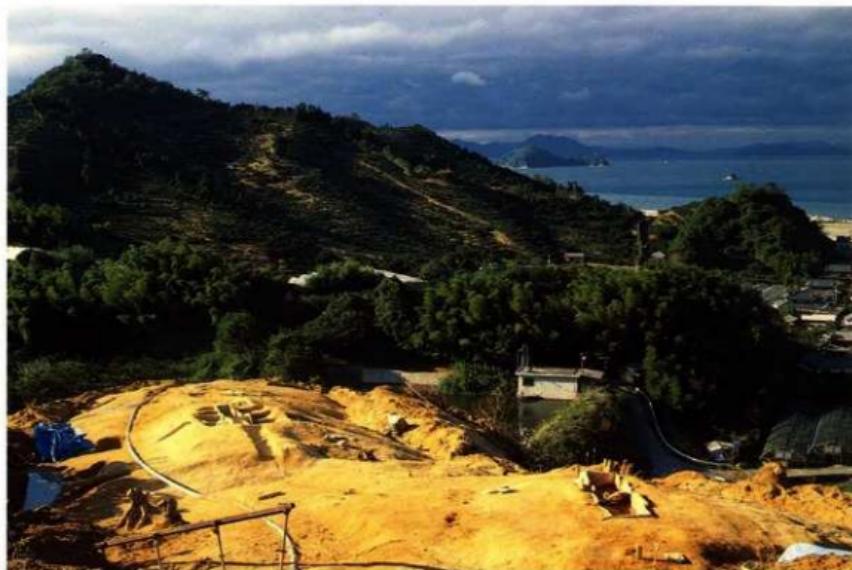
　　"　調査主任　西尾　幸則（担当）

　　"　調査指導員　宮崎　泰好（"）

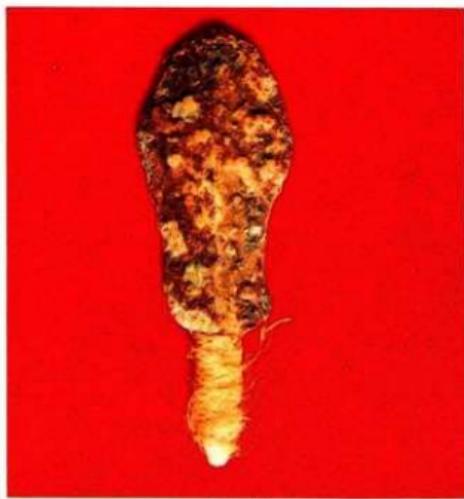
7. 本遺跡の調査にあたって、鶴松下建設、松下長生氏の多大な御助力、及び関係者の御協力をいただきました。また愛媛大学教授下條信行氏からの格別の御助言、御指導等があり、ここに記して感謝いたします。

真

写



調查地全景



銅鑄



調査地から堀江・和気を望む



調査地全景



鉄剣出土状況（第2号古墳）



第2号古墳 主体部（西から）



第2号古墳 主体部



第3号古墳 主体部

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 立地と歴史的環境.....	1
1. 立地.....	1
2. 歴史的環境.....	1
第3章 調査の記録.....	3
1. 調査概要.....	3
2. 第1号古墳.....	5
3. 第2号古墳.....	6
4. 第3号古墳.....	12
5. SX-1.....	16
6. 掘.....	17
7. その他の出土遺物.....	18
第4章 まとめ.....	18

図版目次

- 卷頭図版 1 調査地全景
銅鏡（第2号古墳出土）
- 卷頭図版 2 調査地から堀江・和氣を望む
調査地全景
- 卷頭図版 3 鉄剣出土状況（第2号古墳）
第2号古墳 主体部（西から）
- 卷頭図版 4 第2号古墳 主体部
第3号古墳 主体部
- 図版 1 調査地遠景
調査地全景
- 図版 2 調査地全景
調査地全景（第2号古墳）
- 図版 3 試掘調査状況
第1号古墳（調査前）
- 図版 4 第2号古墳より第1号古墳を望む
第1号古墳（周溝）
- 図版 5 第2号古墳
第2号古墳 主体部（北から）
- 図版 6 第2号古墳 主体部（北西から）
第2号古墳 主体部（西側右）
- 図版 7 第2号古墳 遺物出土状況（鉄剣）
第2号古墳 遺物出土状況（鉄斧・鍔先）
- 図版 8 第2号古墳 周溝（西から）
第2号古墳 周溝（東から）
- 図版 9 第2号古墳 遺物出土状況（周溝内）
第2号古墳 遺物出土状況（周溝内壹）
- 図版 10 第2号古墳 遺物出土状況（銅鏡）
第2号古墳 主体部石材撤去状況
- 図版 11 第3号古墳 全景
第3号古墳 主体部（北西から）
- 図版 12 第3号古墳 主体部（北西から）
第3号古墳 主体部（北西から）

- 図版 13 第3号古墳 周溝及び主体部
第3号古墳 周溝（西から）
- 図版 14 第3号古墳 薙石出土状況
第3号古墳 主体部石材撤去状況
- 図版 15 SX-1 全景
SX-1 遺物出土状況
- 図版 16 SX-1 発掘風景
塚 全景
- 図版 17 出土遺物（第2号古墳周溝内壺）
出土遺物（第2号古墳 主体部 鉄劍）
- 図版 18 出土遺物（第2号古墳 主体部 鋸先）
出土遺物（第2号古墳 主体部 鉄斧・鉄鎌片）
- 図版 19 出土遺物（SX-1）
出土遺物（SX-1）
- 図版 20 出土遺物（第3号古墳）
出土遺物（塚）
出土遺物（その他）

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 高月山地形図	3
第3図 高月山古墳群 調査前コンタ図	4
第4図 高月山古墳群 調査後コンタ図	4
第5図 第1号古墳 全測図	5
第6図 第2号古墳 全測図	7
第7図 第2号古墳 主体部平面図及び土層断面図	8
第8図 第2号古墳 主体部展開図	9
第9図 第2号古墳 周溝内出土土師器実測図	10
第10図 第2号古墳 周溝内出土銅鏡実測図	10
第11図 第2号古墳 主体部内出土鉄器実測図	11
第12図 第3号古墳 全測図	12
第13図 第3号古墳 主体部平面図及び土層断面図	13
第14図 第3号古墳 主体部展開図	14
第15図 第3号古墳 石棺内出土遺物実測図	15
第16図 SX-1 平断面図	16
第17図 SX-1 出土遺物実測図	16
第18図 塚 平断面図	17
第19図 塚 出土古錢	17
第20図 その他の出土遺物実測図	18

第1章 調査に至る経過

高月山古墳群は、松山市勝岡に所在する。この勝岡から松山港及び、国道196号線に通じる道路事情が悪く、現在、県道高浜勝岡線（海岸沿い）の改良工事中である。勝岡地区の区画整理事業に伴ない、土砂が必要となり、この高月山北側を削る事になった。高月山は、市城の遺跡分布地図の中に入っている為、工事担当の㈱松下建設より、市教委文化教育課に埋蔵文化財の試掘調査の依頼があった。この為昭和62年9月10日に踏査を行ない、昭和62年9月25日～30日にかけて試掘調査を行なった。調査の結果、組み合わせ式箱式石棺を検出した。これをもとに、市文化教育課と㈱松下建設が協議し、現状保存が無理な為、記録保存という事で、確認された石棺を中心に調査区を設定した。調査は松山市教育委員会が行ない、発掘費用は松下建設が負担した。

昭和62年10月8日より発掘調査に着手し、最終的には工事対称約16,000m²のうち約440m²の発掘調査と他にトレンチ調査を実施した。

第2章 立地と歴史的環境

1. 立地

高月山古墳群は行政的には、松山市勝岡町乙22番地他に所在している。この高月山は、松山平野西面の海岸線北端の太山寺ヶ森丘陵に立地する。この丘陵のうち北東端のやや突出した分岐丘陵上に高月山がある。この高月山の北東側はやや狭い沖積平野が広がっており、この平野の西側に久万川が流れている。山裾から海岸線までの直線距離は約600mである。地質的には、高月山近辺の丘陵は、粗粒状閃雲花崗岩及び和泉砂岩からなっており、雨水の浸食流入がされやすい。

この高月山からの眺望は、晴れた日には、松山平野北部はもとより、遠くは対岸の広島県を含め瀬戸内海を一望のもとに眺められる。

2. 歴史的環境

この高月山古墳群が所在する松山平野北部は、久万川を挟み、東は高繩山系の分岐丘陵、西には太山寺山塊が立ち並ぶ。この両丘陵上には、北谷古墳群、潮見古墳群、船ヶ谷古墳群、勝岡古墳群などの古墳が多く存在する地域であり、古くは縄文時代の遺跡が、山裾低地に存在する。後期には蓬萊寺遺跡が、後・晩期及び弥生時代前期の大洲遺跡^(注-1)、晩期には、船ヶ谷遺跡^(注-2)や勝岡遺跡がある。大洲遺跡からは、晩期農耕文化を解明する壺や石臼など貴重な資料が数多く出土しており、晩期段階から、農耕に適した地域であった事がうかがえる。弥生時代には、前期の三光遺跡、中期の宮の谷遺跡や、前期から古墳時代の複合遺跡として、鶴

ヶ谷遺跡群がある。高月山古墳群周辺では、古墳時代の集落地はまだ発見されていないが、
(注-3)
 前述の様に、丘陵部に多くの古墳の存在が知られていた。この古墳のうち正式調査が行なわれたのは、北谷古墳群の王神ノ木古墳・塚本古墳群。(注-3) 久万ノ台古墳群の久万ノ台古墳であり、(注-3) (注-4)
 いずれも横穴式石室を主体部とする。又、正式調査ではないが、箱式石棺を主体部とする古墳として、大丸山古墳・坂浪古墳・赤子谷古墳が上げられ、3基とも石棺内より、人骨を検出している。この人骨には、顔面に赤色顔料を施していたと言われば興味深い。坂浪古墳より船載鏡が2面出土しているが詳細は不明である。この高月山古墳群が所在する勝岡古墳群には、随所に、石室に用いられたであろう石材や、箱式石棺に多用される板状の緑泥片岩を利用した塚があり、多数の古墳の存在がうかがえる。

注一1 昭和62年 市教委調査

注一2 長井数秋「船ヶ谷遺跡」県教委

注一3 「松山市史」考古資料集

注一4 森光晴、西尾幸則「久万ノ台遺跡」市教委

注一5 「松山市史料集」第1巻考古編

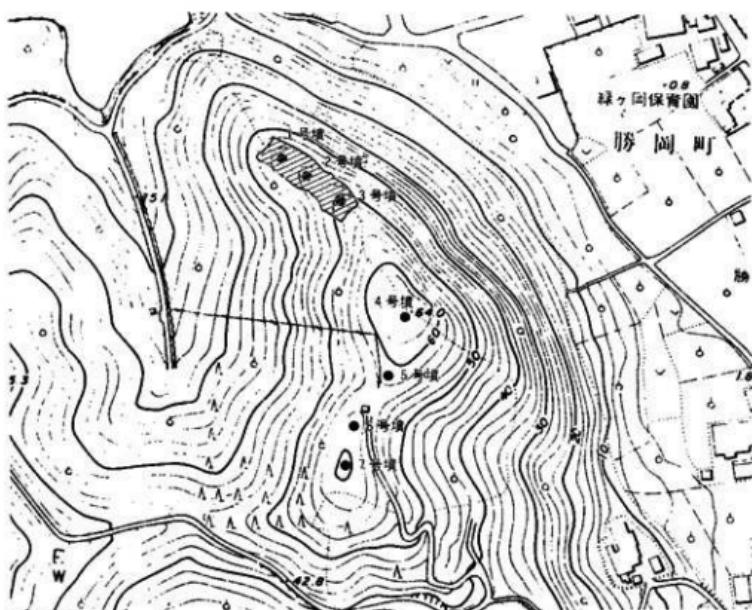


第1図 周辺の遺跡

- | | | |
|--------|----------|---------|
| 1一大瀬遺跡 | 2一蓬萊寺遺跡 | 3一船ヶ谷遺跡 |
| 4一勝岡遺跡 | 5一三光団地遺跡 | 6一宮ノ台遺跡 |
| 7一坂浪古墳 | 8一赤子谷古墳 | 9一大丸山古墳 |

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

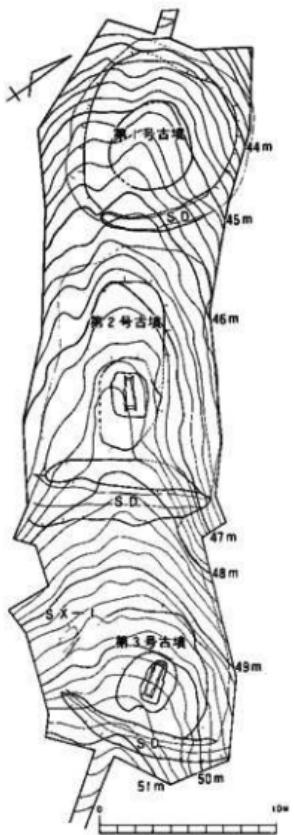


第2図 高月山地形図(S=1/2500) 斜線部調査地

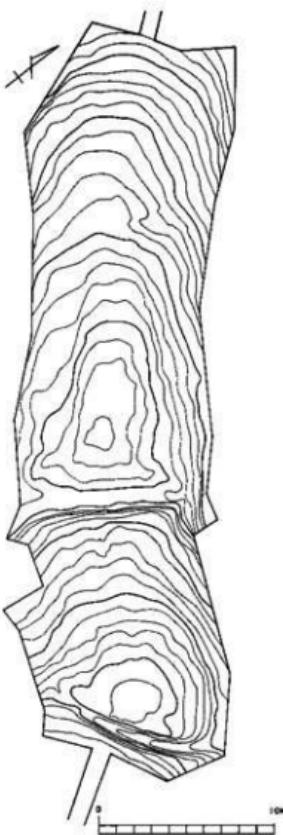
高月山古墳群は、高月山山頂より北西方に派生する小尾根に立地する3基の古墳及び調査対称外の山頂部の4基の計7基で構成される古墳群である。この小尾根先端に第1号古墳があり、尾根基部側に第2号古墳、第3号古墳が相接して存在する。発掘調査は昭和62年10月8日～11月11日まで行ない調査面積は440m²であった。調査前の状況では、調査区北・東側が土砂の流失、西側には、パイプやモノレール埋設及び耕作等でかなり削平、擾乱が多かった。

第1号古墳は、周溝の一部を検出したが、主体部、墳丘部版築はなかった。周溝が内溝している事と一部墳丘変換点から径10mの円墳と思われる。周溝より土師器片が出土した。

第2号古墳は、組み合わせ式箱式石棺を内部主体とする長方墳である。尾根背後を断面逆台形の直線的な溝で区画している。墳丘部は、客土は見られるが、版築はなかった。出土遺



第3図 高月山古墳群
調査前コンタ図 ($S = 1/300$)



第4図 高月山古墳群
調査後コンタ図 ($S = 1/300$)

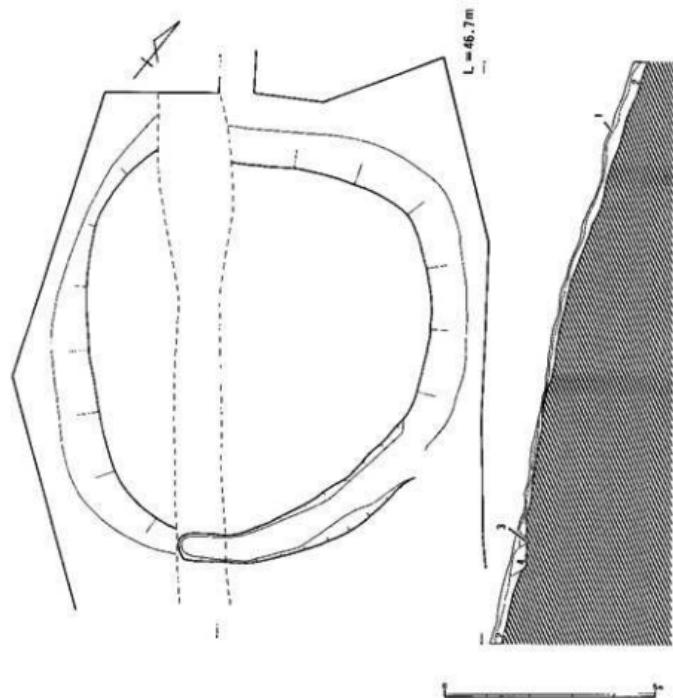
物は棺外副葬として主体部側石沿いの青色粘土中より、鉄剣一振、鉄斧1点、銀先1点、鉄鎌片1点、土師器片。周溝内より、柳葉式の銅鏡1点、畿内布留I式併行期の内外面赤彩で孔を持つ壺の完形1点、土師器片が出土した。又、主体部直上には近世の塚があった。

第3号古墳は、組み合わせ式箱式石棺を内部主体とするやや楕円状の円墳である。これも2号墳と同様に尾根背後に、断面U字状のやや湾曲した溝で区画している。版築は見られな

かった。出土遺物は、主体部石棺内より、鐵劍片1点と寛永通宝が1点出土したのみである。

他の遺構としては、第3号古墳西側より、住居址状の遺構（SX-1）が検出した。このSX-1基底面直上より、弥生時代後期初頭の甕が出土している。

2. 第1号古墳



第5図 第1号古墳 全測図 (S=1/200)

第1号古墳 土層説明
第1層 表土層
第2層 黄褐色土層
第3層 黒色土層
第4層 暗茶褐色砂質土層

第1号古墳は、尾根線上、標高45m付近に位置する。調査区北西端で、尾根先端部である。著しい土砂流失とパイプ埋設の擾乱の為、主体部、版築等は確認できなかったが、本古墳の尾根背後北側で周溝の一部を検出した。この周溝と北側斜面で墳裾と思われる傾斜変換部を一部検出しており、その状況から、径約10mの円墳と考えられる。

周溝は、幅60~110cm。深さ10~20cm、長さ6mを測り、墳丘中央に向かい湾曲している。覆土は暗茶褐色砂質土で、周溝内より土師器片が10片出土した。この土師器片は、体部のみの破片で、外面は刷毛目を、内面はヘラミガキを施しているが、器形、時期とも確定できないが、畿内布留期併行期の土師器片と思われる。

3. 第2号古墳

第2号古墳は、尾根が平坦面を成す標高47.6m付近、ちょうど調査区中央に位置する。調査前の状況では、パイプ埋設や土砂の流失等で、墳丘は確認できなかったが、主体部直上に近世の石積み塚があり、試掘調査の段階で主体部を確認する事ができた。

この古墳は、組み合わせ式箱式石棺を主体部としており、尾根背後を尾根線に直交する直線的な溝で区画している。

又、主体部石棺内は、蓋石が原位置を保っておらず、石棺南側に蓋石を重ね、その上に、近世段階で石積みの塚を作っている事から、盜掘されており、流入土だけであった。

墳丘

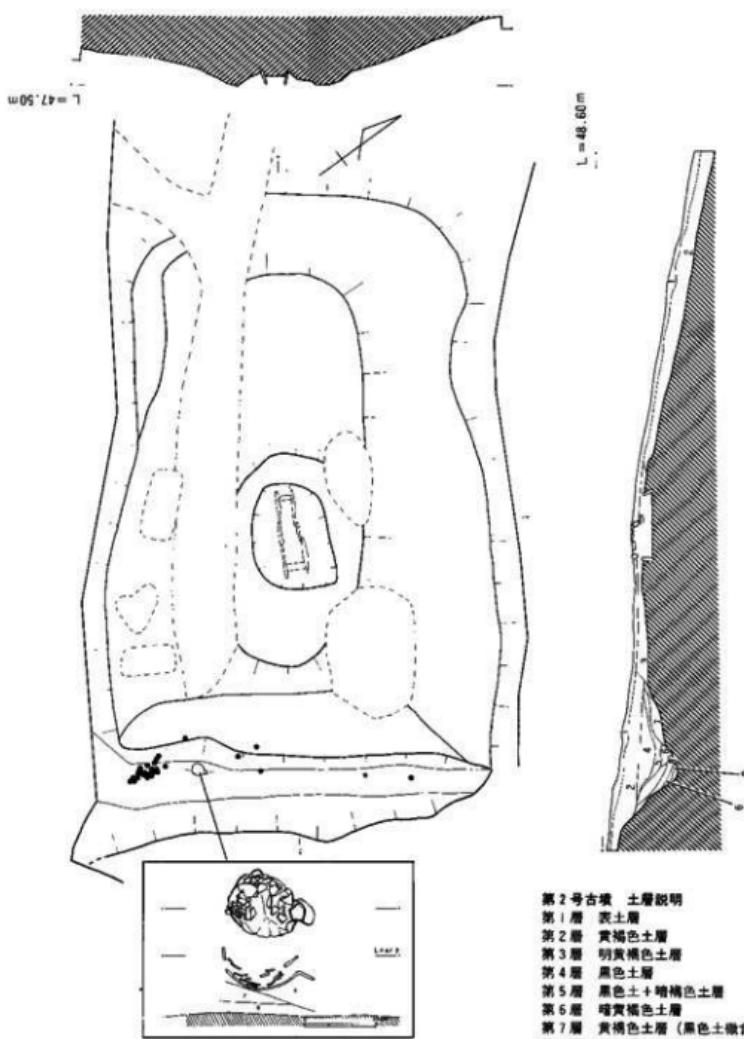
墳丘は、擾乱等の為、版築は検出できず、主体部近くで客土の一部を確認したのみである。第2号古墳の墳丘形態を考えた場合、尾根背後の溝が直線である事、墳北西部で、墳裾と思われる傾斜変換部を検出した事を合わせると、その状況から16m×10mの長方墳と考えられる。又、地形に左右されたか定かでないが墳丘北側にくびれが認められる。

周溝

周溝は、尾根鞍部を掘り込んで作られた直線的な溝である。規模は、長さ9.3m、上端幅1.9m、下端幅0.7m、最深部で1.4mを測る。横断面は逆台形状で、壁の立ち上がりは急である。溝底面は平坦である。周溝内覆土は、黄色土が主体で上層に黒色土が堆積していた。第6層暗黄褐色土層中に遺物が含まれており、銅鏡1点が周溝内東側に、土師器の壺の完形と土師器片が周溝内西側より出土した。この完形の壺は横に置かれた状況の出土である。

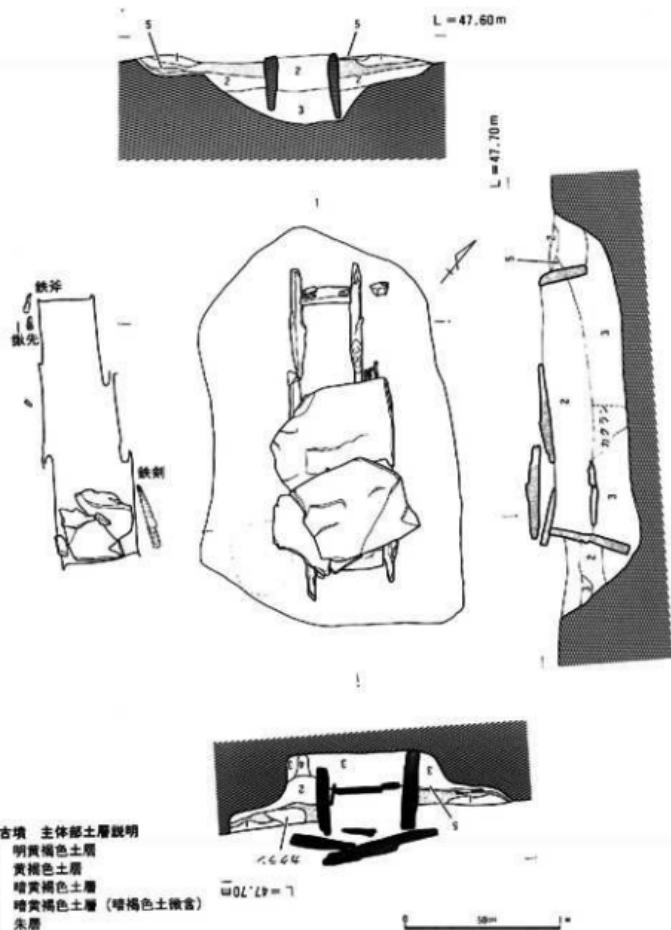
主体部

内部主体は、墳丘部ほぼ中央で、高月山の尾根線上に構築しており、主軸はN-63°49'40"-Wである。蓋石は、盜掘等で動いていたが残存の蓋石（緑泥片岩）で復元すると3枚の板石を用いていたと思われる。石棺は、地山（粗粒斑状閃雲花崗岩）面を切削整地し墓拡を形成後構築している。この構築段階で石棺上端やや下に粘土と水銀朱を墓拡内全面に貼っている。墓拡は全長260cm、幅210cm、深さ90cmを測る長楕円形で二段構造をなす。



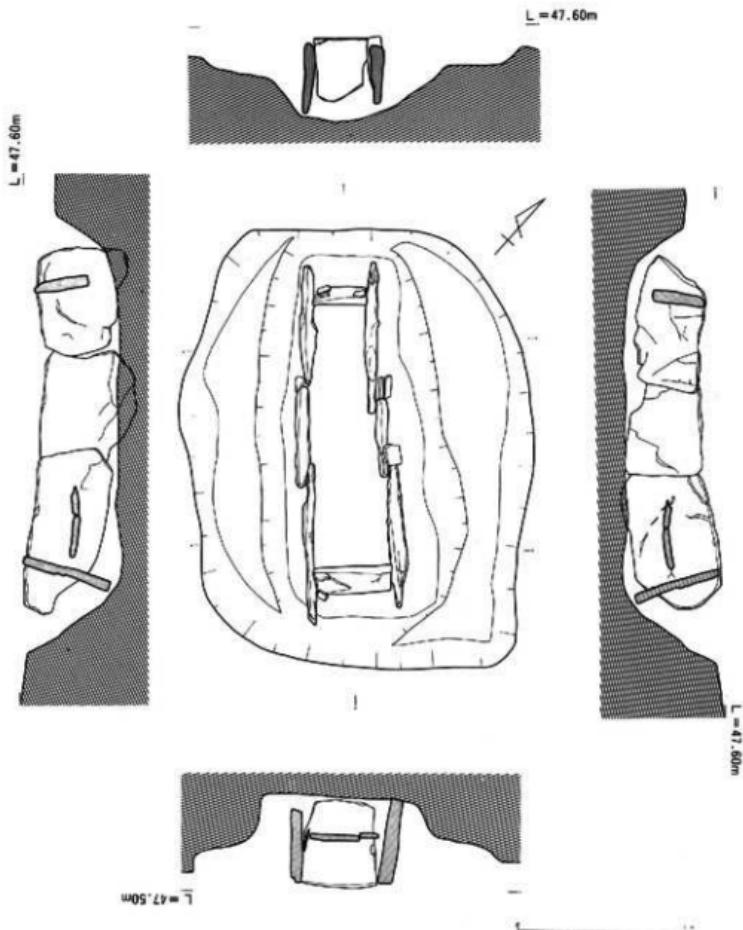
第6図 第2号古墳 全測図 (S = 1/200)

石棺全体は、全長216cm、軸北で45cm、南61cmを測る。板状の緑色片岩を部材として、小口石1枚ずつ、側石3枚ずつを用い、小口を両側石で挟み、側石両端とも突出させて組み合わ



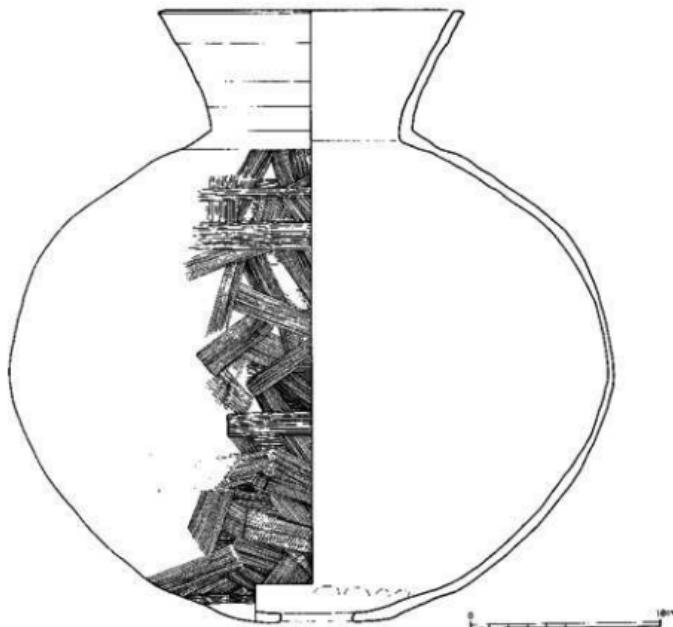
第7図 第2号古墳 主体部平面図及び土層断面図 (S=1/40)

せている石棺である。小口の両側側石は、北で厚さ7cm、深さ37cm、長さ33cm。南で厚さ6cm、深さ52cm、長さ47cmを測る。東側石は3枚で、北から厚さ8cm、深さ44cm、長さ90cm。厚さ7cm、深さ44cm、長さ47cm。厚さ10cm、深さ47cm、長さ86cmを測る。西側石も3枚で、北から厚さ10cm、深さ41cm、長さ72cm。厚さ80cm、深さ46cm、長さ63cm。厚さ7cm、深さ52



第8図 第2号古墳 主体部展開図 (S = 1/40)

cm、深さ92cmを測る。棺床面は、壊剝土を埋め戻し固めて形成している。南側小口寄りに、幅45cmの範囲に、厚さ3~4cmの板材（安山岩）を3枚用いて敷石としている。この敷石を枕石として利用したと思われる。棺床面の法量は、長さ166cm、幅北で32cm、中央で40cm、南で49cmを各々測る。側石上端より棺床面までの有効深度は、20~25cmである。又、石棺構築段階の末の散布が石室内棺床面まで、小口石、側石とも内面に残っていた。



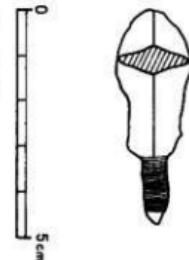
第9図 第2号古墳 周溝内出土土師器実測図 ($S = 1/4$)

主体部内出土遺物としては、棺外副葬を行なっており、棺外埋土青色粘土中より、側石に沿って、鐵劍1振、鐵斧1点、銛先1点、鐵鎌片1片、土師器片1片が出土した。内、鐵劍は頭位東側沿い。他の鐵器は足位西側沿いにまとまって出土した。

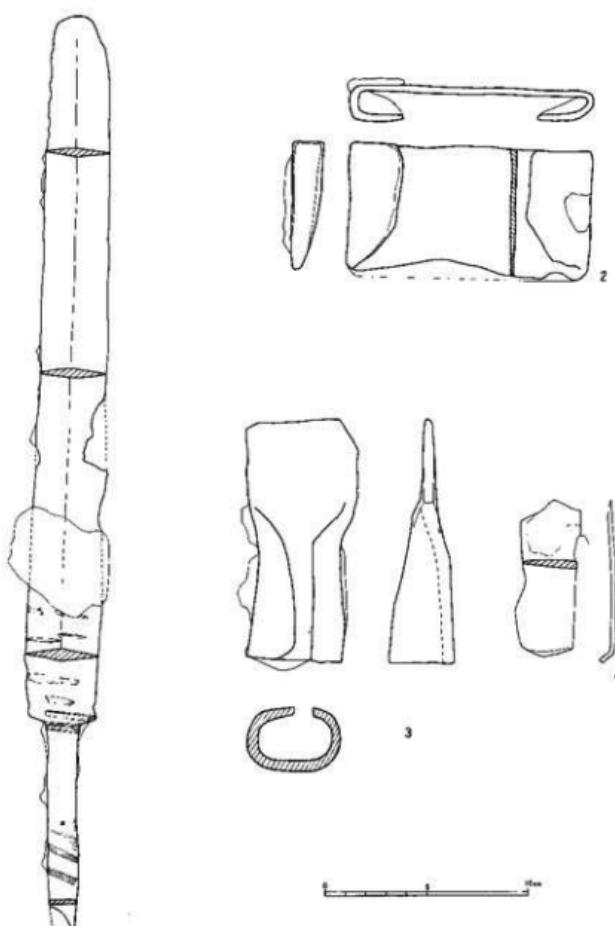
出土遺物

第2号墳からの出土遺物は、土師器、銅鎌、鐵器が上げられる。

1 (第9図)は、土師器の盞である。丸底で、体部は球形に近く内湾する。最大径は胴部の中位にとり、内湾しながら頸部に至る。口頸部はやや外反しながら上方に開く。端部は丸くおさめられている。外面底部から頸部付近までハケメで、口頸部内外面は横ナデで内面はヘラ削り、色調は黄灰色。内外面とも体部上半から口縁にかけて赤色顔料で赤彩されており、底部近くに径3.5cmの円孔を焼成後に穿つ。口径16.0cm、器高32.0cm、胴形31.6cmである。



第10図 第2号古墳
周溝内出土銅鎌
実測図 ($S = 1/2$)



第11図 第2号古墳 主体部内出土鉄器実測図 (S = 1/3)

2 (第10図)は、柳葉形の銅鏡である。両刃作りで、全長4.75cm、最大幅1.7cm、厚さ6mmを測る。鏡身部と茎からなる。茎には、麻の繊維が巻きつけられている。

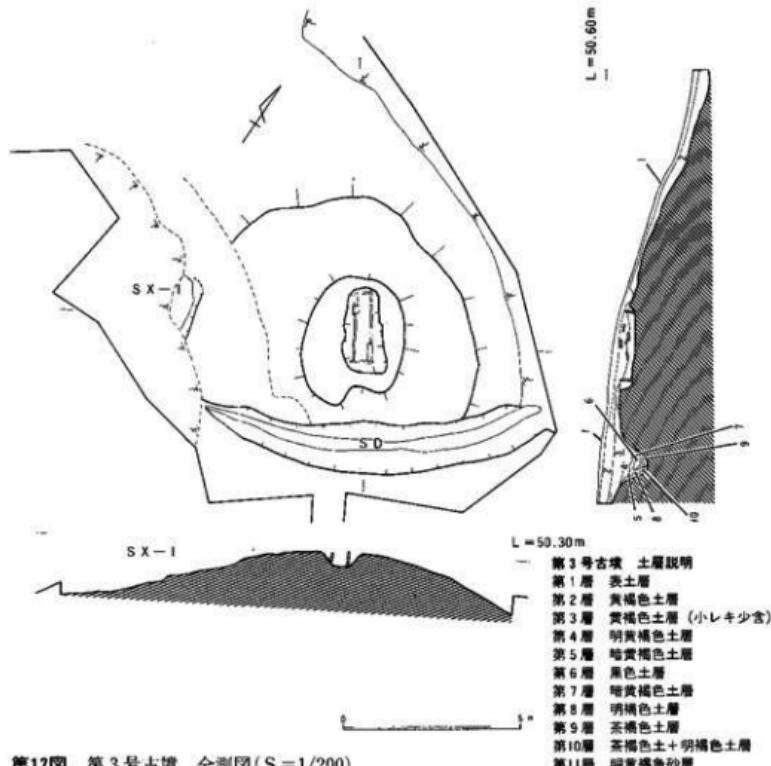
3 (第11図-1)は、鐵劍である。刃先を除き、鎬が確認できた。関の形状は撫角に削り込んだもので、茎尻は一字文字である。茎尻から5.2cmの位置に目釘孔が穿たれている。全長45cm、刃幅3.2cm、茎幅は関付近で1.8cm、中央で1.4cmを測る。

4 (第11図-2) は、銀先である。長方形の鉄板の左右両端部を内に折り返して風呂部を挿入する為の袋部をつくるタイプである。横幅12cm、縦6.3cm、袋部は3.2cmの幅で折り返させて1.1cmの空間をつくる。

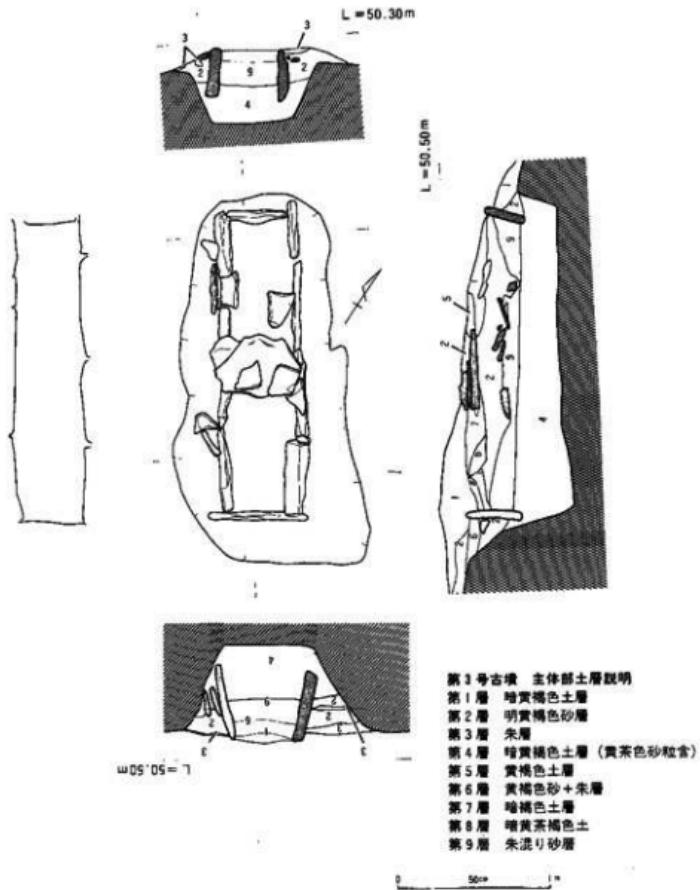
5 (第11図-3) は、鐵斧である。柄を挿入する為の筒状の袋部を有する。平面形では無肩である。全長12cm、刃厚5cmを測る。左右対称形にならず、直線的で一方に偏している。袋部は内径3.5cm、内長6.8cmを測り、横断面は不正橢円形を呈する。又、鐵斧側面形は、二等辺三角形状を呈する。

6 (第11図-4) は、鐵鎌片である。基部(折り返し部)の砂片である。幅2.9cm、残存長7.7cmを測る。折り返しは、刃に対して鈍角に折り返えされている。

4. 第3号墳



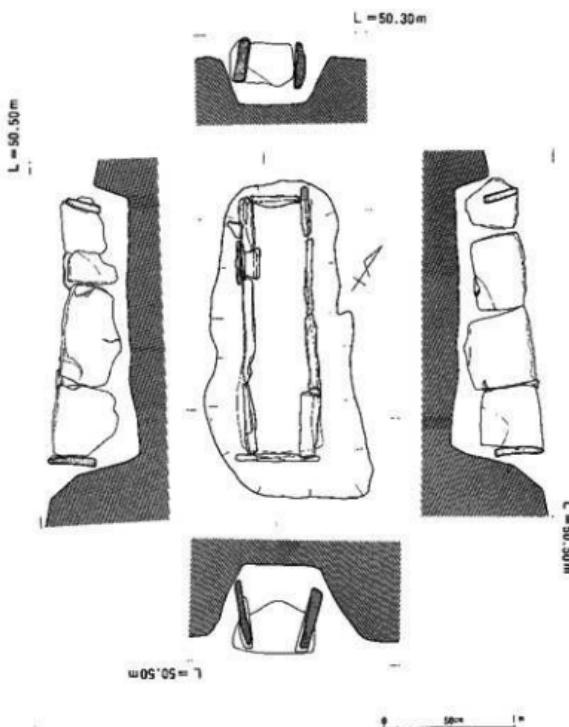
第12図 第3号古墳 全測図(S=1/200)



第13図 第3号古墳 主体部平面図及び土層断面図 ($S=1/40$)

第3号古墳は、尾根がやや平坦面をなす標高50.2m付近、調査区南端に位置する。

調査前の状況は、墳丘部西側でモノレール支柱埋設や耕作及びパイプ埋設で、北東側は土砂流失等で墳丘は確認できなかった。トレンチ調査により主体部を確認した。この古墳は、組み合わせ式箱式石棺を内部主体としており、背後を尾根線に直交するやや湾曲する溝で区画している。蓋石は原位置を保っておらず、石棺内は朱まじりの流入土が入っていた。



第14図 第3号古墳 主体部展開図 ($S = 1/40$)

墳丘

土砂の流失、攪乱等で地表では確認できなかったが、尾根背後の区画の溝がやや主体部に向かい湾曲している事から、推定9m規模の楕円状の円墳と考えられる。版築、盛土等は検出しなかった。

周溝

周溝は、尾根背後を掘り込んで造られた、やや湾曲した溝である。規模は、長さ9.7m、上端幅1.5m、下端幅0.4m、最深部で0.9mを測る。横断面は、U字状である。周溝内覆土は、黄褐色土が主体で上層が黒色土である。

基底面は、西から東に向け傾斜を持つ。又、溝は西端部に向け狭くなり消失する。

主体部

内部主体は、墳丘部中央やや南寄りの尾根軸線上に構築している。主軸はN-35°20'22"-Wである。又、第3号古墳主体部は、ちょうど高月山山頂より北西部に派生する小尾根がやや西にくびれる変換点上に立地している。

石棺は、地山面を切削整地して墓拵を形成後構築している。又、構築時に、朱の散布が石棺内外に見られる。墓拵は、全長244cm、幅86~115cm、深さ25~70cmを測る長楕円形である。蓋石は、調査時には、石室中央に陥没した状態の石材しか残っていなかった。この石材は安山岩を使っている。

石室全体は、長さ212cm、幅北53cm、南で51~64cmを測る。組み合わせ方は、両小口石とも両端を側石端を合わせており、長方形を呈する。

小口の両側石は、北で厚さ5cm、深さ32cm、長さ39cm。南で厚さ6cm、深さ41cm、長さ64cmを測る。東側石は、北から厚さ7cm、深さ34cm、長さ38cm。厚さ6cm、深さ37cm、長さ58cm。厚さ8cm、深さ34cm、長さ49cmを測る。西側石は、北から厚さ8cm、深さ32cm、長さ43cm。次は、3枚の小形石材を用いており、おおむね厚さ2~3cm、深さ15~38cm、長さ24~33cmを測る。次の石は厚さ6cm、深さ33cm、長さ56cmを測る。

棺床面は、掘削土を埋め戻し固めて形成している。規模は、長さ196cm、幅北で43cm、中央で45cm、南で44cmであり。側石上端より棺床面までの有効深度は23~32cmである。

主体部出土遺物としては、石棺内流入土より、鐵鏃片1点と寛永通宝1点が出土した。又、流入土が朱混じりの砂であった事から、構築時に朱の散布が多くかった事がうかがえる。

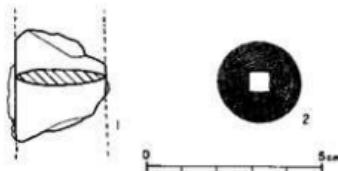
出土遺物（第15図）

出土遺物は石棺内出土遺物のみであった。

1は、鐵劍の刃部の破片で、残存長3.3cm、刀幅2.6cm、厚み4mmを測る。鏃は確認できなかった。

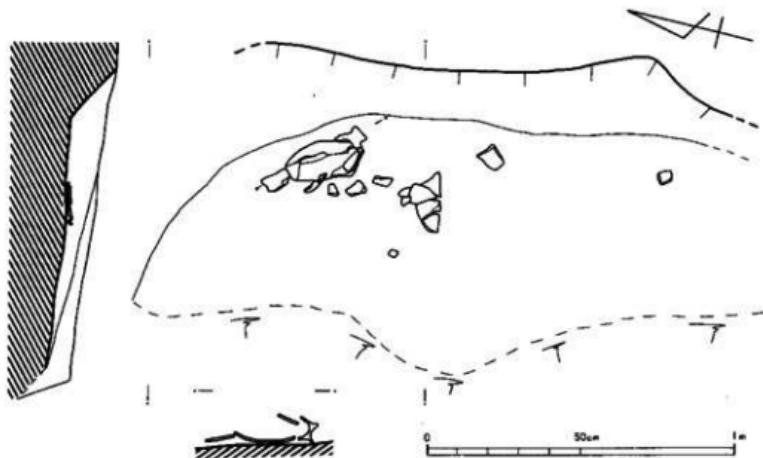
2は、寛永通宝である。徑2.3cm、厚み1.1mmを測る。

2は、近世段階の盜掘時の流入と思われる。

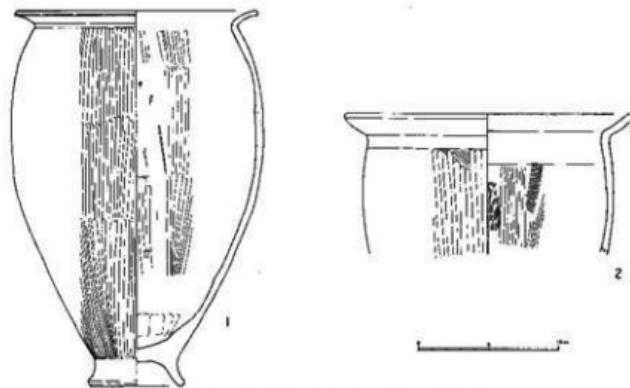


第15図 第3号古墳 石棺内
出土遺物実測図 (S=1/2)

5. SX-1



第16図 SX-1 平断面図(S=1/30)



第17図 SX-1 出上遺物実測図(1/4)

調査区南、3号墳西側に位置している。耕作等の理由で擾乱がひどかった。擾乱土除去中に遺物の出土により確認した。斜面山側（第3号古墳墳丘側）の壁と、基底面の一部を検出したのみでプランまではわからなかった。

壁は、1.5mの検出で、北端で丸みを持つ。壁高は、15cmで、なだらかに立ち上がっている。基底面は190cm×70cmの範囲を検出した。平坦でやや硬く、やや西に向かい下がり気味である。

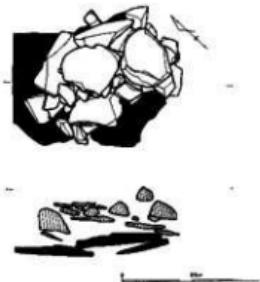
覆土は、第一層擾乱土。第2層は、砂粒混じりの黄土で、遺物を包含する土層である。出土遺物は、基底面直上より、甕が2個体出土した。

1(第17図-1)は、やや外反して「く」の字状をなす口縁部をもつ。胴部は、比較的薄手なつくりで、外面は縱方向に丁寧なヘラミガキを、内面は下から上へいったんケズリ上げたのち、ヘラミガキを施している。胴部最上径はやや上方にあり、口径とほぼ同じである。底部は上げ底で、内面には指頭圧痕を残す。胴部上位に煤の附着が認められる。口径は17.4cm、器高26.9cm、底径68cmを測る。

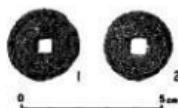
2(第17図-2)は、口縁のみの出土である。口縁部がわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。胴部外面はハケメ調整のちヘラミガキ、内面は縱方向のハケメを施す。推定口径20cm。

本遺構は、SX-1として取り上げたが基底面の状況を考えると、住居址状遺構として把えたい。

6. 塚



第18図 塚 平断面図(1/30)



第19図 塚 出土古銭(1/2)

塚は調査区中央、2号墳主体部の重ねた蓋石上に位置している。この塚は、高月山の砂岩質の岩を用い、不正規円柱状に乱積みに積まれている。径110cm×65cm。高さ34cmを測る。塚内出土遺物としては、寛永通宝が2点出土した。

1は、径2.5cm、厚み1.8mm。2は、径2.4cm、厚み1.1mmを測る。(第19回)

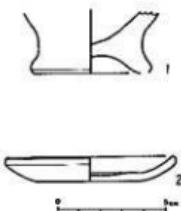
この塚は近世に積まれたもので、盗掘時か、主体部確認時に積まれたと思われる。

1. その他の遺物（第20回）

ここでは、表土及び擾乱土中出土の遺物を取り上げる。

1は、第3号古墳の西側SX-1近辺の擾乱土中からの出土である。甕の底部で、底径5.8cmを測り、上部底になっている。一部ヘラミガキが認められる。色調は暗褐色で少量の砂粒を含む。このSX-1近辺の擾乱土からは他に、弥生土器片が9点出土しており、1を含めて、SX-1に伴なっていたと思われる。

2は、第2号古墳の西側の擾乱拡内出土である。近世の土師皿で、底部から口縁にかけて外上方に開き、口縁端部は面をなす。内外とも横ナデである。底部切り離しは回転糸切りである。色調は、茶褐色で、焼成は良い。推定口径1.9cm、推定底径4.8cm、器高1.2cmを測る。



第20回 その他の
出土遺物実測図(1/3)

第4章 まとめ

今回報告した高月山古墳群が所在する高月山には、図-2で示した様に1~3号墳の他に、4基の古墳が山頂部尾根線上に所在する。

4号墳には、現在「ほこら」が祭ってあり、耕作時に、横穴式石室が露出し、直刀、人骨、須恵器、玉類が出土したと言わるが詳細不明である。5~7号墳は踏査し墳丘部を確認し、須恵器片、土師器片を探集している。細片の為、図示はできなかったが、杯身の破片から、6世紀後半と思われる。以上高月山古墳群は計7基の古墳から成り立つ。今回は調査した範囲で述べる事にする。

主体部消失の1号墳は別として、2号、3号墳とも箱式石棺の主体部を尾根線上に築造し、尾根線背後を尾根線に直交させて溝を掘り、溝でもって区画し墓域を構成し、墳丘部を形成している。古墳で尾根線背後のみ溝を掘るのは、県下では四ツ手山古墳。他県でも見られる。
(注-1) (注-2)

墓域を示すとともに、この溝の掘削土を墳丘盛土に使われたであろう。

次に主体部構築方法であるが、2・3号墳に共通しているのは、尾根線上に不正長方形の墓拡を掘り、その掘削土をもって箱式石棺の石材を固定させ、石棺内部に掘削土を固めて棺床面を形成している。埋葬時に水銀朱を石棺内外面と墓拡内埋土に散布している。

2号墳主体部には、埋葬時に青灰色粘土を石棺の外側墓拡内全面に厚さ8cm前後貼っている。又、粘土中には鉄器を副葬していた。一般には、粘土を貼る場合、蓋石をも含めて密封する場合が多いのだが、当古墳群の2号墳主体部では、墓拡内覆土上層及び、墓拡外から粘土を検出しなかった事から、埋葬時に蓋石を含めて粘土をおおわなかつたと考えられる。

第2号古墳出土の鉄器は、鉄劍一振。農工具として、鉄斧、鍬先、鉄鎌片である。棺内は盜掘の為出土遺物はなかったが、棺外副葬品としてこれらの鉄器が上げられる。それも墓拡

内粘土中の出土で明らかに埋葬時である。頭位の方に鉄剣が、足位の方に農工具が出土しており、埋葬時に頭位を意識して副葬したと考えられる。又、農工具にはいずれも使用痕があり、被葬者が生前使用したものと考えられる。

県下で、箱式石棺を主体部とする古墳の内、墓括内、棺外副葬を行っているのは、当古墳の他、猪の窓古墳のみである。ただし猪の窓古墳は追葬が行なわれており、出土鉄器の量種類が違^(注-3)い、比較はできないが、いずれの古墳からも墓括内棺外副葬品として鉄器の出土があり県下で確認されている箱式石棺にもまだ類例が考えられ注意していただきたい。

今回出土した銅鑑は、柳葉形銅鑑であった。県下出土の銅鑑は、弥生時代から古墳時代にかけて出土しているが、古墳出土の柳葉形銅鑑は、他に今治市国分古墳・東予片山3号墳のみである。この国分古墳、古墳時代前期の前方後円墳で4世紀末～5世紀初頭の構築と言わ^(注-4)れており、当高月山古墳群第2号古墳を解明する一資料になるとを考えている。

又、古墳出土の鑑は、一般に古墳時代前期には銅鑑を副葬する例が多く、中期になり、銅鑑より殺傷力の強い鉄鑑を多く副葬する様になり、銅鑑を副葬する例が少なくなる傾向になる。この事から、高月山第2号古墳は、銅鑑副葬が主体となっている古墳時代前期と考えたい。

高月山古墳群出土の古式土師器は、第1号古墳周溝内と第2号古墳周溝内出土の直口壺(図-9)と別個体の破片のみである。第2号古墳出土の土師器は周溝内下層、銅鑑と同一層からの出土である。

この直口壺は、外面とも上半に赤色顔料が塗られており、底部に焼成後穿孔がある。小さく肥厚する口縁部、球形の形態、外面に細かい刷毛目を横・斜に施しており、内面をヘラケズリ、薄い器壁等から、畿内布留I式併行期と考えている。又、出土状況から立ててか、横にしてかは定かではないが原位置出土で、当第2号古墳の副葬もしくは、祭祀と言って差しつかえなく、合わせて当古墳築造期を示す資料である。

古墳時代前期において、畿内の桜井茶臼山古墳や佐賀県鶴子塚、岡山県金蔵山古墳、広島県中出勝負峰古墳群第8号墳出土の底部穿孔の壺を、いわゆる壺形埴輪と言われている。これらは高月山古墳群出土の壺とは違い、弥生時代後期の二重口縁を受けつき、球形の体部の壺で焼成前穿孔である。当古墳群出土の壺は、口縁部が直口で底部穿孔が焼成後ではあるが類似性が認められる。又、香川県猫冢古墳より、焼成前穿孔の直口壺が出土している。

県下では、古式土師器の出土例が少なく、在地の編年が確立していない事から、布留I式併行期^(注-10)と唱えた。古墳時代前期において庄内、布留式土器が在地の土器と融合しながら西日本一帯に流布している。この直口壺も搬入土器とは違い、在地色の強い土器と考えているが、県下の古式土師器の編年を含めて再検討していただきたいと考えている。

弥生時代の遺構としては、S X-1のみであった。基底面及び遺物出土状況から、高地に立地する単独住居址と考えている。又、永住的な住居というよりも、一過性の住居と考えら

れる。SX-1からは、実測可能な甕が2個体出土した(図-17)。うち1は、弥生時代中期後葉の凹線文系の甕の影響を強く受けた土器であるが、口縁端部のつまみ上げが、後期の甕に類似している事、2が後期初頭の土器である事から、SX-1は後期初頭段階に位置づけたい。

当古墳群の築造年代は、第2号古墳出土の鉄器、銅鏡及び土器器が布留I式併行期である事から、4世紀末～5世紀初頭と思われる。構築順序は、立地状況等から1号→2号→3号墳と考えられる。又、第2号墳と第3号墳は、主体部構造の違い(粘土有・無等)及び尾根線背後の溝の違いから、若干の時間差があると思われる。

県下の箱式石棺の研究としては、松岡文一氏、長井數秋氏らによって進められている。しかし、石棺内のみの確認にとどまっている例が多く、墳丘部を含めた調査は少ない。特に、石棺内においては盗掘が多い事もあり出土遺物が少なく、築造年代を決める手段が乏しかったのが現状である。

又、県下の前期古墳は、今治平野では国分前方後円墳、雉之尾方墳、相の谷一号前方後円墳等が知られているが、当松山平野では、前期の埴輪片が出土している弁天山OA号墳、伊予市桜山古墳が知られているぐらいである。合わせて、弁天山OA号墳を含めて、松山平野西面の丘陵部、特に沿岸部丘陵においては、多くの箱式石棺の存在が知られていた。しかしながら詳細な内容がわかつておらず、これらの意味において、今回の調査により松山平野、特に西側における箱式石棺をなす前期古墳の一形態ではあるが築造年代が確認できた。又、前期においても、弥生時代の箱式石棺が引き続き残り、地方色の強い墓制であった事も伺われている。

注-1 伊予三島市、(財)愛媛県埋文センター調査、昭和57年

注-2 広島県須賀谷古墳群、石鎧山古墳、石鎧山権現古墳群、長迫古墳

注-3 長井數秋、山本雅夫『猪の塚古墳』伊予市教育委員会

注-4 「愛媛県史:考古資料編」四国では香川県(吉岡神社古墳・石清尾山古墳群猫塚・石清尾山古墳)、徳島県(愛宕古墳)

注-5 中村春寿、上田宏範『桜井茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書19

注-6 松尾賀作『佐賀県佐賀市銚子塚』日本考古学年報4

注-7 西谷真治・篠木義昌『金藏山古墳』

注-8 佐々木直彦他『歲ノ神遺跡群・中出勝負峰墳墓群』(財)広島県埋文センター

注-9 香川県高松市摺鉢山古墳群所在。

注-10 松山平野では他に古窯遺跡、宮前川遺跡が知られている。

注-11 松岡文一『川之江市史—古墳編』川之江市教育委員会 1960



調査地遠景



調査地全景（手前第2号古墳）



調査地全景



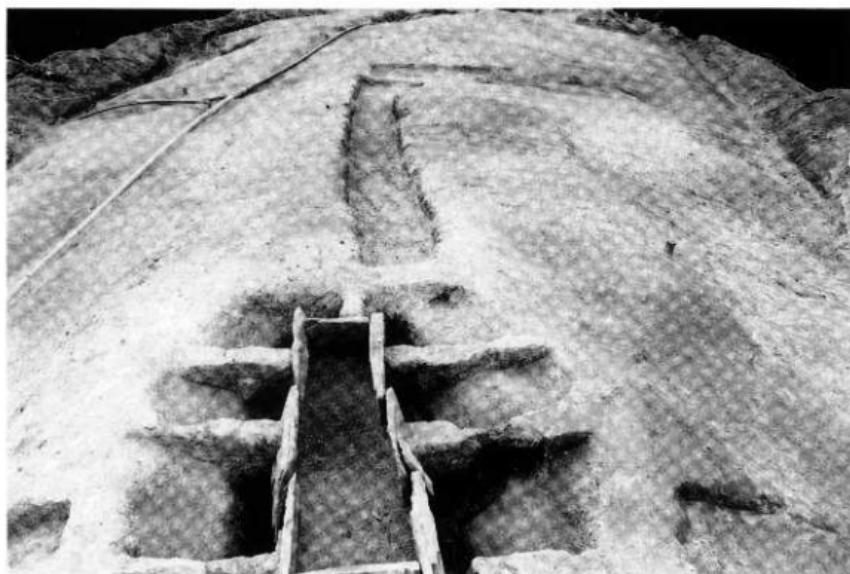
調査地全景（第2号古墳、第3号古墳）



試掘調査状況



第1号古墳(調査前)



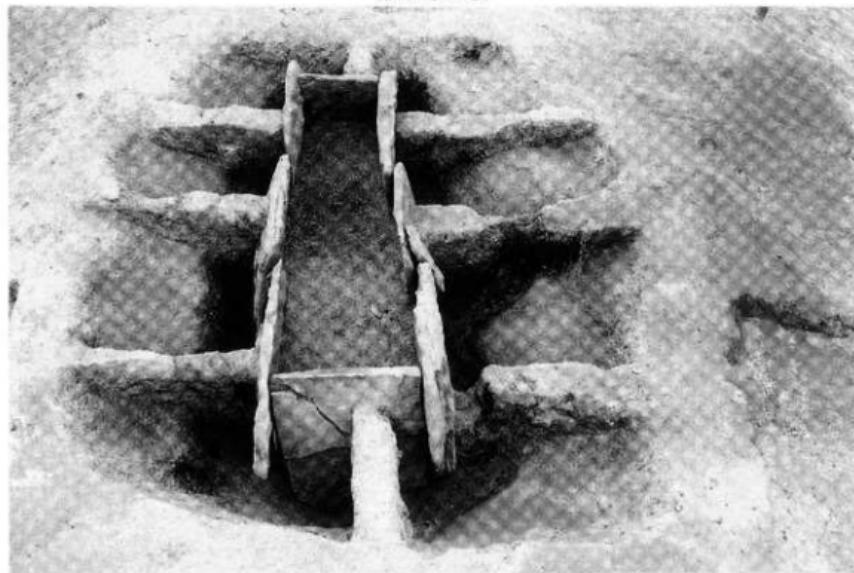
第2号古墳より第1号古墳を望む



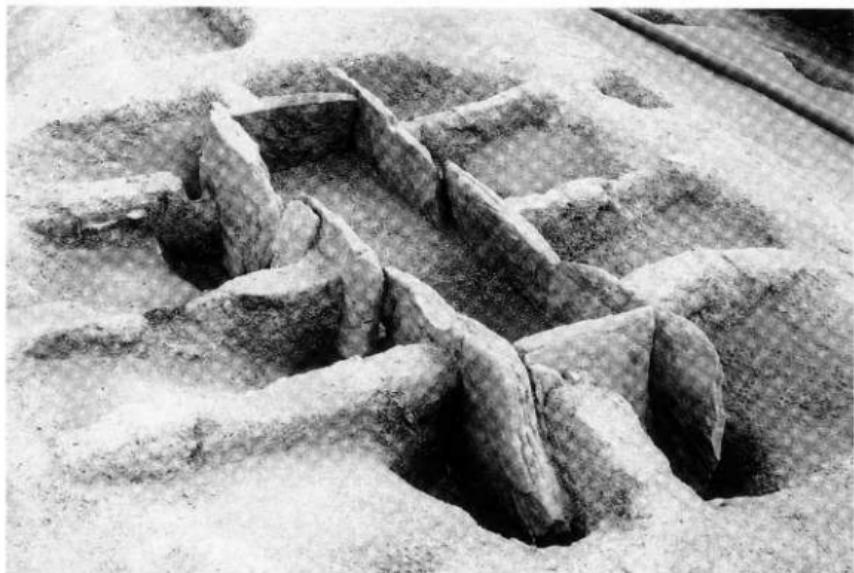
第1号古墳 周溝土層断面



第2号古墳



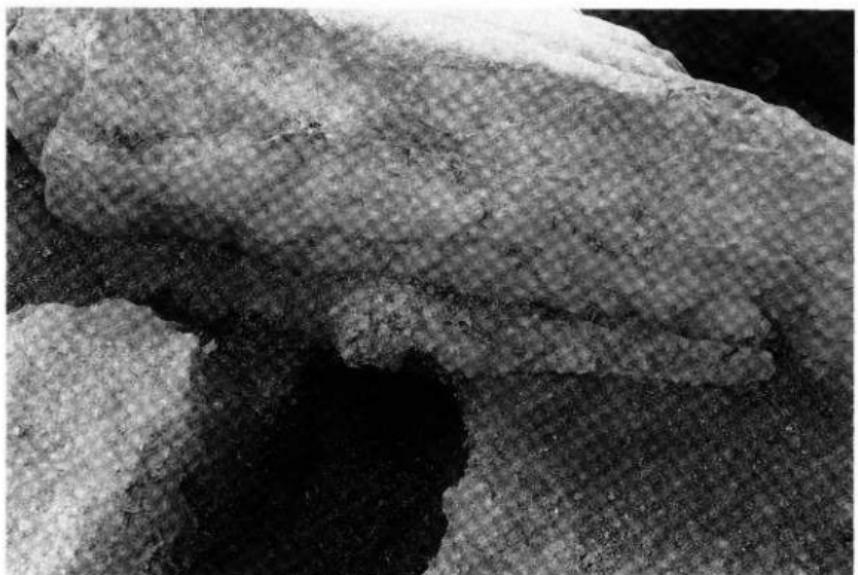
第2号古墳 主体部（北から）



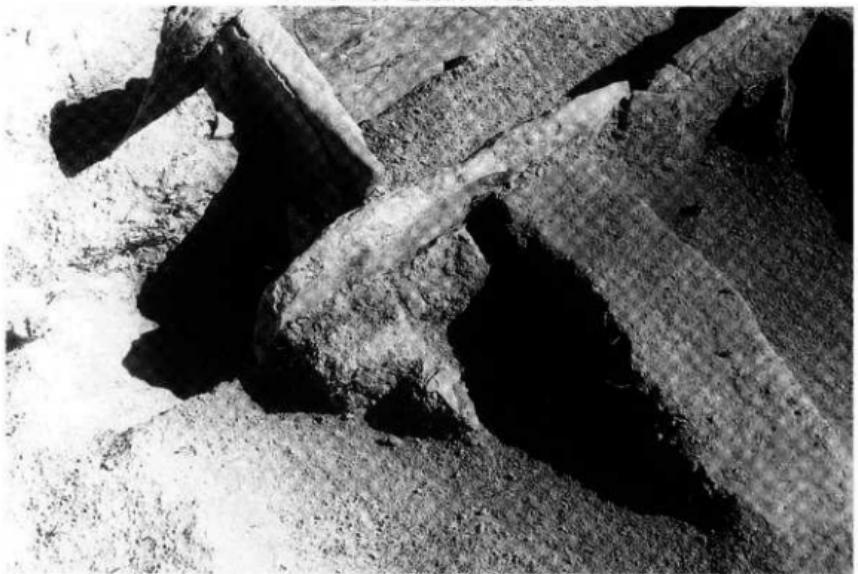
第2号古墳 主体部（北西から）



第2号古墳 主体部（西侧右）



第2号古墳 遺物出土状況（鉄剣）



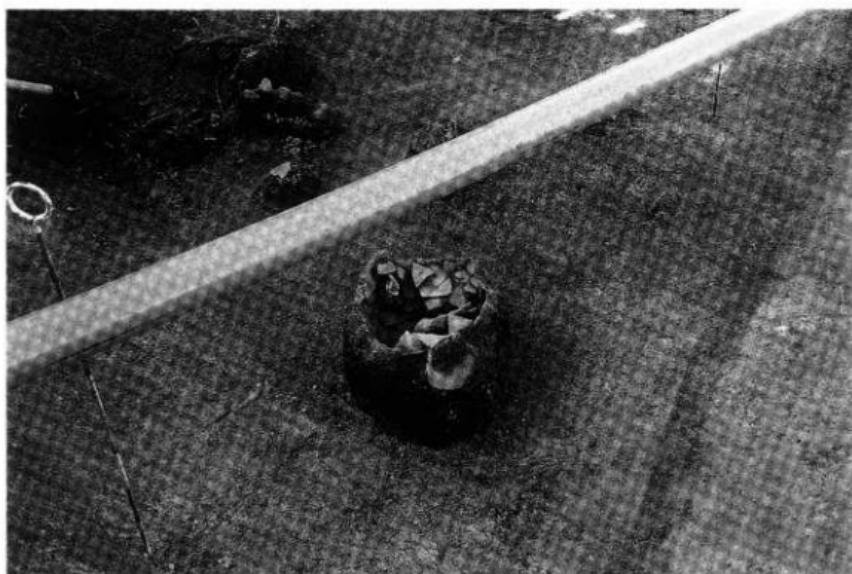
第2号古墳 遺物出土状況（鉄斧・鉗先）



第2号古墳 周溝（西から）



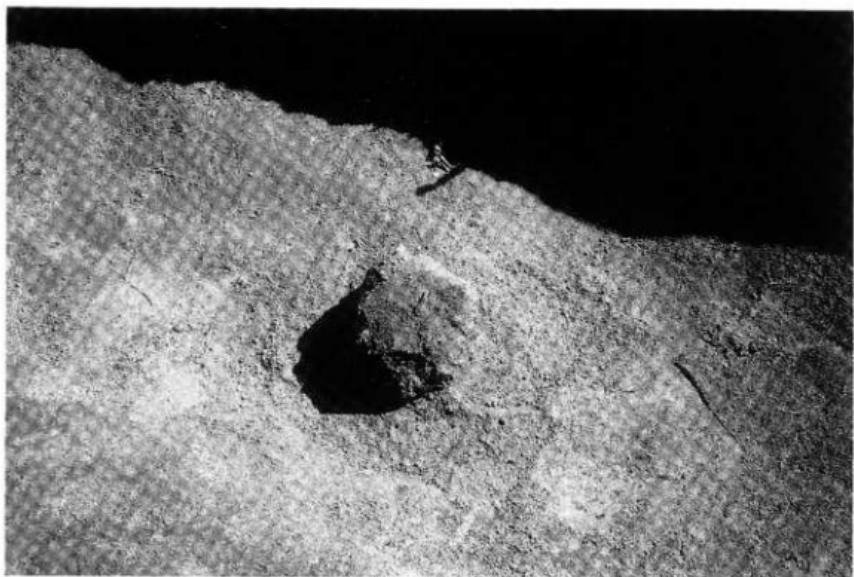
第2号古墳（東から）



第2号古墳 遺物出土状況（周溝内）



第2号古墳 遺物出土状況（周溝内壠）



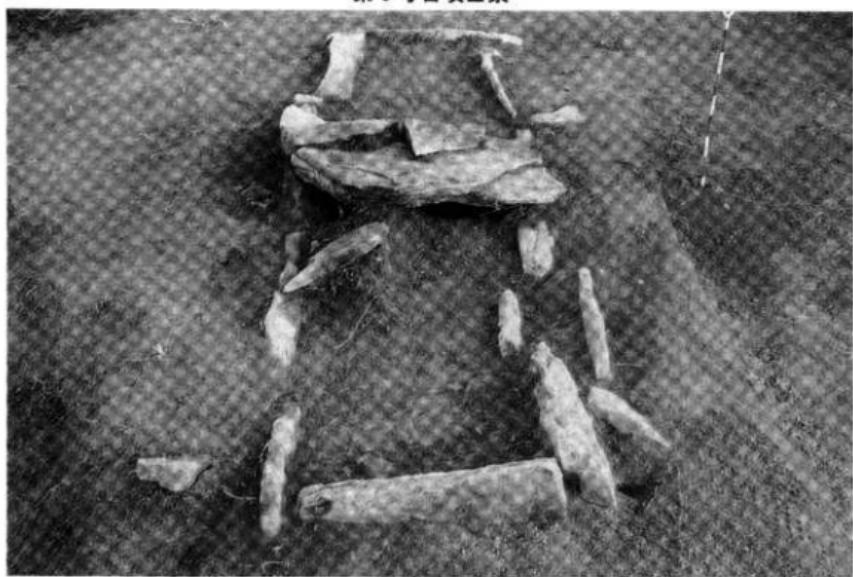
第2号古墳 遺物出土状況（銅 鐵）



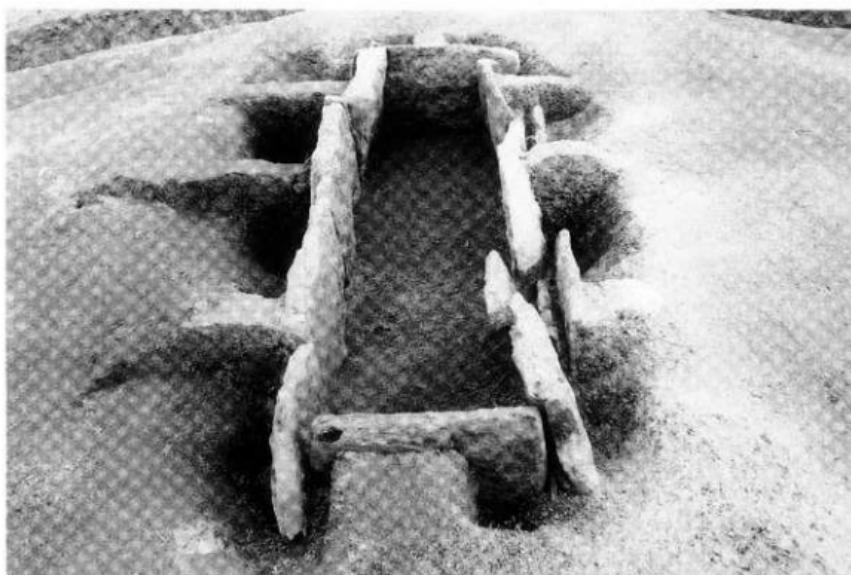
第2号古墳 主体部石材撤去状況



第3号古墳全景



第3号古墳 主体部（北西から）



第3号古墳 主体部（北西から）



第3号古墳 主体部（北から）



第3号古墳 周溝及び主体部



第3号古墳 周溝（西から）



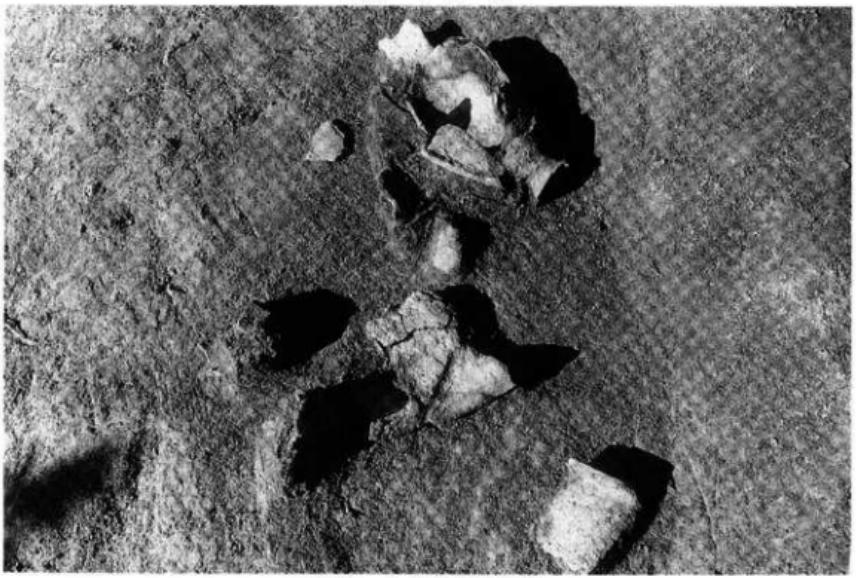
第3号古墳 蓋石出土状況



第3号古墳 主体部石材撤去状況



SX-1 全景



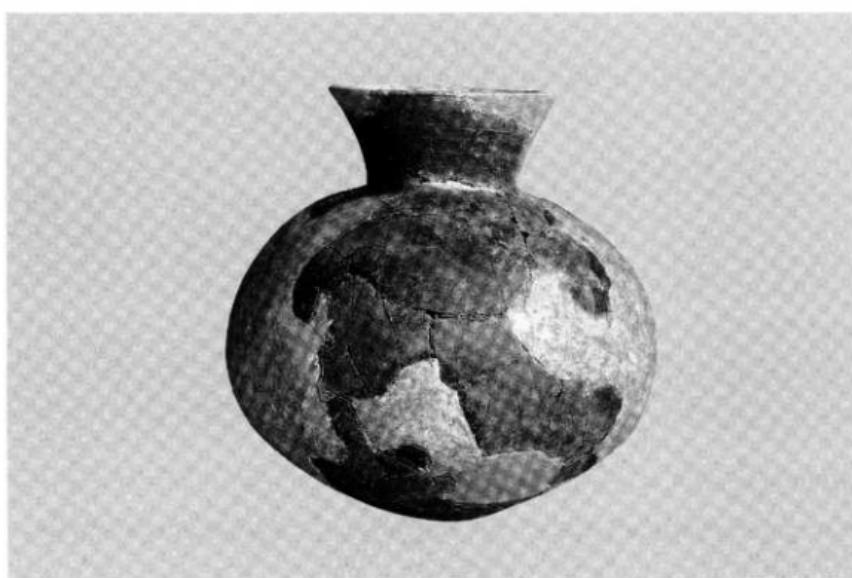
SX-1 遺物出土狀況



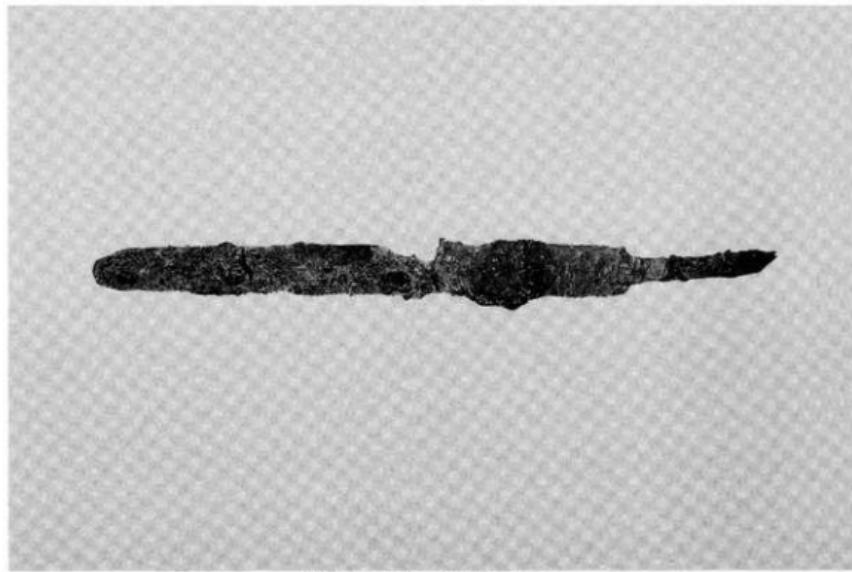
SX-1 発掘全景



塚 全景



第2号古墳 周溝内 壺



第2号古墳 主体部 鉄劍



第2号古墳 主体部 錄先



第2号古墳 主体部 鉄斧



鉄鎌片

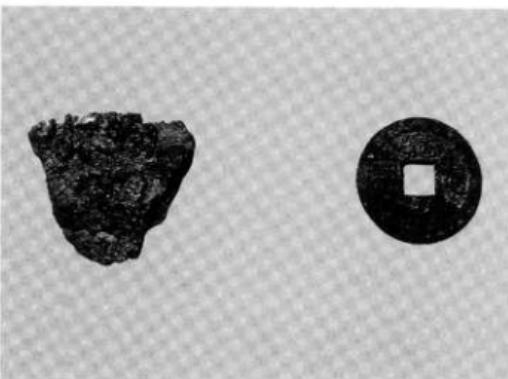


S X—1 出土遺物

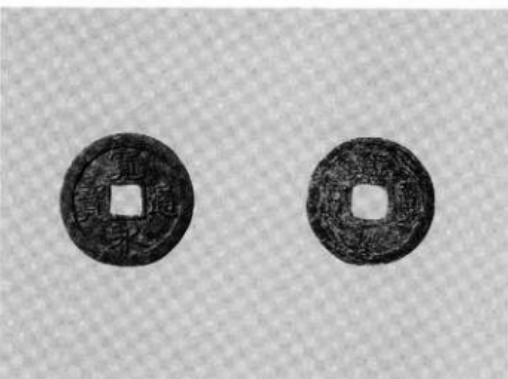


S X—1 出土遺物

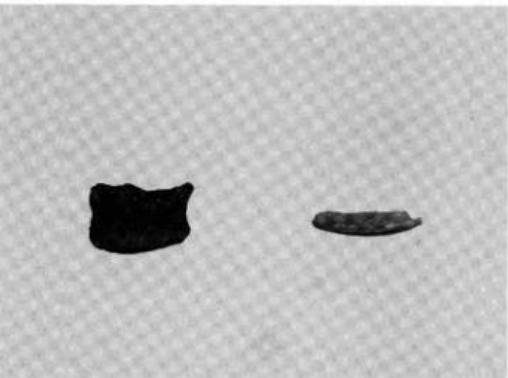
第3号古墳 出土遺物



塚 出土遺物



他の出土遺物



松山市文化財報告書

1	三島神社古墳	昭和47年（絶版）
2	天山・桜谷古墳	昭和48年（〃）
3	長隆寺跡	昭和49年（〃）
4	古照遺跡	〃（〃）
5	釜ノ口遺跡	〃（〃）
6	かいなご・松ヶ谷古墳	昭和50年
7	国道バイパス概報	〃（絶版）
8	岩子山古墳	〃
9	御産所11号墳・忽那山古墳・久 万ノ台古墳	昭和51年（絶版）
10	古照遺跡II	〃（〃）
11	文京遺跡	〃（〃）
12	来住庵寺跡（国指定史跡）	昭和54年
13	五郎兵衛谷古墳	〃
14	浮穴・西石井荒神堂・東本II、 III・桑原高井遺跡	昭和56年
15	東山薙が森古墳群	〃
16	齊院茶臼山古墳	昭和58年
17	国道11号線バイパス調査報告	昭和59年
18	宮前川遺跡	昭和61年

松山市文化財調査報告書 第19集

高月山古墳群

昭和63年3月31日発行

編集 松山市教育委員会

発行 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7番地2

TEL (0899) 48-6520

印刷 明星印刷工業株式会社

